

広報企画事業（ニュースレター・概要・年報）（※③企08）

『東京文化財研究所年報』『東京文化財研究所概要』『東文研ニュース』の刊行は、広報企画事業（ニュースレター・概要・年報）（③企08）の一環として実施した（概要・ニュースは研究支援推進部企画渉外係が編集を担当）。詳細は、57頁を参照。

平成26年版『日本美術年鑑』 刊行事業・出版事業『美術研究』（調査・研究成果の公開）（⑥企09-15-5/5）

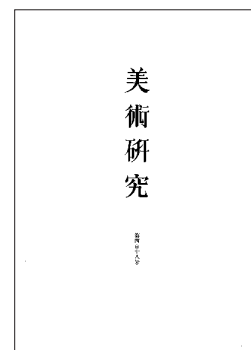
『日本美術年鑑』

日本美術年鑑は、我が国の各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録した刊行物である。企画情報部では当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が1936（昭和11）年から始めた『日本美術年鑑』の編集を引き継ぎ、刊行を継続してきた。平成26年版は、B5判、474ページとなった。出版に際し、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。



『美術研究』

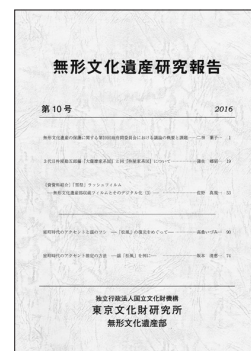
1932（昭和7）年1月、当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所の初代所長・矢代幸雄の提唱により第1号を刊行。以来、80年以上にわたり、日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関する西洋美術についての論文、研究ノート、書評、展覧会評、図版解説・研究資料等を掲載している。本年度は416号、417号、418号を刊行した。出版に際して、東京美術商共同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。



無形文化遺産部出版関係事業（⑥無04-15-5/5）

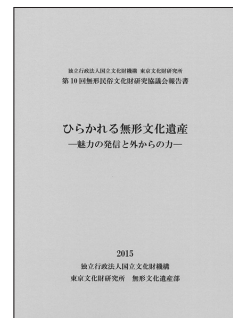
『無形文化遺産研究報告』

無形文化財や無形民俗文化財、文化財保存技術に関する研究論文、調査報告、資料紹介等を掲載している。



『無形民俗文化財研究協議会報告書』

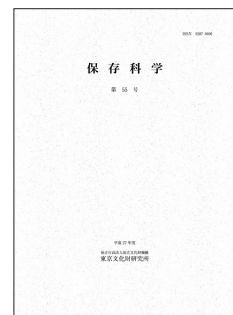
無形文化遺産部では毎年テーマを定め、保存会関係者・行政担当者・研究者などが一堂に会して無形の民俗文化財の保護と継承について研究協議する会を開催している。第10回にあたる本年度は、「ひらかれる無形文化遺産―魅力の発信と外からの力」をテーマとして開催し、その報告・総合討議の内容などをまとめて報告書として刊行した。



『保存科学』 55号の出版 (⑥必修09-15-5/5)

『保存科学』 55号

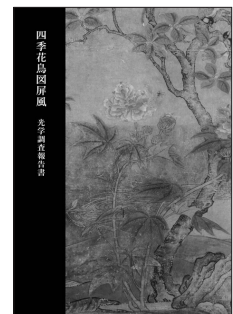
文化財の保存・修復に関する調査・研究成果の公開を目的に、研究論文集『保存科学』を刊行した。様々な文化財の科学的調査結果や基礎研究に関する論文、受託研究に関する研究報告・修復処置報告等を掲載している。また、より一層の研究成果の公開に努めるため、『保存科学』掲載論文PDFファイル化を行い、インターネット上での公開を行った。今年度は報文2件、報告11件、計13件の論文を掲載した。



プロジェクトの一環として刊行された刊行物

『四季花鳥図屏風 光学調査報告書』(①必修01の一環として実施)

サントリー美術館が所蔵する四季花鳥図屏風（重要文化財）は室町時代に描かれた花鳥画の代表作として知られ、中国の花鳥画を粉本にしていると考えられているが、やまと絵風の画面構成がなされている興味深い作品である。東京文化財研究所では平成27年度に非破壊・非接触の光学調査を実施した。本書では、高精細カラー・近赤外線画像を多数掲載するとともに、蛍光X線分析、X線透過撮影、可視反射分光分析の調査結果を併せて収録した。2016年3月刊行、168ページ。



『平等院鳳凰堂内 光学調査報告書』(①必修01の一環として実施)

本書は、平等院鳳凰堂須弥壇に関する光学調査報告書である。鳳凰堂須弥壇に関しては、これまで、詳細な画像記録が行われたことはほとんどなく、金属部材等に関しても一部の材料調査が行われていたにすぎない。東京文化財研究所では、平成27年度に複数回の光学調査を実施し、須弥壇の現状を正確に記録するとともに、数多くの金属部材の材料調査を行った。本書では、多数の高精細画像を掲載するとともに、蛍光X線分析による金属部材の調査結果をすべて収録した。2016年3月刊行、256ページ。

